

はじめに

学習者として教師として —日本語学習のライフストーリーから

日本語学習のスタートと順調な習得

15年ほど前、私、(キム ヨンナム)の日本語の勉強は偶然に始まりました。大学進学の際、ただ自分の成績に合わせて無難に選んだ学科が日本語科だったのですが、思いのほか日本語の勉強が面白かったので猛烈に取り組みました。大学の4年間のプログラムは、前半が教科書を中心とした日本語の基礎学習、後半が、日本事情、歴史、文学などの知識・情報の学習で、より高度な日本語の運用能力をめざしたものとなっていました。大学ののんびりしたカリキュラムに物足りなさを感じた私は、一人で教科書と文法書を読みあさり、常用漢字も独学で覚えてしまいました。大学2年生の頃にはJLPT1級を取得し、日本語の仕組みが完全に理解できていて、文法に関しては何一つ疑問がないほどでした。当時、私にとって毎日のクラスは新しいことばや言い回しをたくさん習って自分の表現の範囲を広げるといった意味が大きく、日本語は「たくさん覚えて、十分練習した後、必要に応じて手際よく活用する」ものとなっていました。学校のテストで毎回ほぼ完璧な答案が出せただけでなく、実際に頭に浮かんだことのすべてを日本語に置き換えることができ、日本人の先生とのやり取りにおいても何一つ不自由を感じなかったのも、自分の日本語はもう完成したとまで思っていました。ただ、実生活の中で日本語を使うチャンスがなかったせいで、ひたすら頭の中でシミュレーションしていることが気になり、大学卒業後、日本に行くことにしました。当時は自信に満ちあふれていて、2～3か月ぐらい住めば実際に日本語を使う感覚がつかめると思っ

©2012 by HOSOKAWA Hideo, TAKE Kazumi, KIM Yong-nam, SAKATA Reiko, MURAKAMI Masami, and MORIMOTO Keiko

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise, without the prior written permission of the Publisher.

Published by 3A Corporation.
Trusty Kojimachi Bldg., 2F, 4, Kojimachi 3-Chome, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0083, Japan

ISBN978-4-88319-593-0 C0081

First published 2012
Printed in Japan

ていました。そして、日本での生活の中で実際に日本語を用いて、自分の日本語の力を確かめることで、自分が大学4年間を捧げた「日本語の習得」にいいよピリオドが打てると思っていました。

実感のないことば

ところが、いざ日本で暮らし始めてみると、最初から何ともいえない違和感を覚えました。日本で実際に耳にする日本語は、教科書の世界での日本語とはずいぶん違っていたのです。それまで十分わかっていると確信していた日本語の構造と枠が根本から揺さぶられました。一緒に働いていた高校生は「すごいおいしい」と形容詞を二つ辞書形のまま並べるし、ラジオ放送からは「…アルバムをリリース」「アットホームな雰囲気…」などといったカタカナ語がひっきりなしに流れていました。「うざい」が辞書に載っていないので悩んでいたなら、「うっとうしい」のことでした。私の基準ではすべて間違った日本語で望ましくない言い方でしたが、周りのみんなは気にしていないように見えました。とはいえ、多少のずれがあるにしろ、日本語でのやり取りそのものには全く問題がなかったといえます。生活する上で何の支障も感じられないほど周囲の日本語は聞き取れ、私自身も問題のない日本語を使っていたつもりでした。

しかし、私は心の奥底では困難を感じていました。表面上は、アルバイトの傍ら、新しい交友関係も着実に広げていたので、日本での生活にすっかり馴染んでいるように見えたのですが、実情は違っていました。なぜか私には、人と自分がつながっているといった実感がありませんでした。自分がこの地の一構成員として根を下ろせず、ずっとお客さんのままでいる感じがしていました。人と話すとき、自分の口から確かなことばが流れているのに、私自身はそこにいない感じがしました。抜け殻のような日本語を話している感覚のまま、本当の自分がさらけ出せず、次第に孤立感を覚えるようになりました。しかし、何が問題なのかがわからず、これ以上何を勉強すればいいのか悩みました。周り

の人は「日本人よりきれいな日本語を話すね」と驚いていましたが、まったくうれしく思えませんでした。自分が教科書から習った日本語しか使えず、覚えたことばを機械的に使い分けしているだけだと思いました。

当時の私は、「自然な日本語」という、日本語母語話者が話すモデルがあると思いついていました。自分が教科書という架空の世界のことばばかりを学んだせいで、現実の世界で用いるべき日本語との間に乖離が生じていると結論付けたのです。しかし、母語を話すときのように自然体で日本語を用いるレベルに達するために、いったい何を勉強したらいいのか。私はそのまま日本で大学院に進学し、その答えを探ることにしました。

ことばの主体としての自分

「総合活動型日本語クラス」には大学院に進学してから出会いました。それまで活動型クラスの経験がなかったため、そもそも「教科書なしで日本語を学ぶ」という発想が私にはありませんでした。そのため、このクラスの第一印象は、「肩の力を抜いてのんびり日本語で会話を交わす場所」でした。当然、新しい何かを学ぶといった期待感もなく、これまで培ってきた日本語のフル活用＝活動だと漠然と思いました。ところが、このクラスで私はそれまでの自分の日本語観のすべてを覆される経験をします。

大学時代から長年にわたって日本語を学習してきた私にとって、母語話者による添削は不可欠な過程でした。日本人に最終チェックしてもらうことでようやく私の日本語は日本語らしい形になり完成すると思っていたのです。しかし、活動型クラスでは、非母語話者の私の日本語の使い方や表現の正しさ・日本語らしさに触れる人はおらず、私の話す内容に注目し、私の考えていることを理解しようとし、また話の続きを聞こうとしました。クラスでは「互いの考えていることの交換」がやり取りの中心となったため、私も自然と日本語としての完全さよりは、いわんとする内容をいかにことばで具現するかにフォーカスする必要がありました。しかし、誰も私の日本語を正してくれない

という状況が最初は不安で、気になっていました。それまでの日本語の学習においては、日本語の正確さが評価の対象となり、問題があると判断される場合は、「減点」とともに「訂正」と「注意」が与えられるのが普通だったからです。そのため、「私の日本語は大丈夫なのか」という疑問はしばらくの間ありました。

今になって思えば、長い間「日本語にしたものを添削して完成」する訓練を受けてきた私は、日本語を形の見える膨大な「構造物」として捉えていました。そして、なんとかその枠の実体を究明し、日本語を自分に従属させようと思っていたのでしょう。しかし、日本語の構造にばかり注目したことは、かえって枠だけの日本語の世界に自分自身を閉じ込め、さらに奥のほうへと追い込む結果を招いていたと思います。それまで長い間、私は自分が日本語を用いる「主体」であることに気づかずにいましたが、活動型クラスに参加したのを機に、自分の用いる日本語の構造ではなく、その向こうにいる相手を見るようになりました。自分の思いを日本語にのせて相手に伝えることを意識するようになって、ようやく自分と他者が「つながる」感覚を得られるようになったと思います。日本語は自己表現のための言語的手段の一つで、相手とコミュニケーションを成り立たせるための道具に過ぎなかったのです。

初級でこそ活動型を

私は大学院を修了し、同大学院の日本語教育センターの日本語講師になりました。大学院に在学中のときは、活動型クラスは中上級レベル以上の学習者を対象にしていましたが、その後、初級でもクラスが開設され、私はひらがなを覚えたばかりの学習者を対象にした初級の活動型クラスを担当しています。

活動型クラスの実践に興味をもたれた先生方に「初級でも活動型クラスができるのですか」「初級から活動型クラスをする必要がありますか」などといった質問を受けることがあります。初級からでももちろん活動型クラスの

実践は可能で、私はむしろ初級こそ活動型クラスの実践の意義が大きいと思っています。

日本語を習得してコミュニケーションで用いるためには、まず日本語の文法や言語的知識を理解するとともに、語彙や表現を地道に覚え、自分の表現できる範囲をこつこつと広げていく過程が必要であることはいうまでもありません。そのために多くの教師がクラスでは教科書を使用して学習者を指導し、またよりよい成果を導き出そうと日々さまざまな工夫を凝らし、勉強を重ねています。しかし、一方で、教科書は日本語の総体を学習のために体系的に整理して順に並べた「日本語の一例」であることを否定しがたいのも事実です。実際、教科書と日常生活での日本語との隔たりを学習者が強く感じ、クラスの外で直面する「教科書にはない日本語」や「非文法的な日本語」による混乱と戸惑いを訴えてくることも多くあります。

これに対し、初級の活動型クラスは、まさに「教科書にはない日本語」、「非文法的な日本語」が盛んに飛び交うクラスともいえます。しかし、学習者は自分の話す日本語が文法的に不完全な表現であっても、たとえ用いられる語彙が限られていたとしても、自分の思いがしっかりと他者に届く経験をします。さらに、私が来日初期に切実に望んでいた「自分と人がつながる感覚」もこのクラスを通じて得られるようになっていきます。活動型クラスでそれを可能にするのは学習者それぞれの「相手に伝えたい」「相手の話を聞きたい」と思う気持ちで、その熱意と努力が相まって自分の思いをのせた日本語でのやり取りが意味をもつものとして成り立っていくのです。このように初級の活動型クラスは、将来のために日本語の準備をする場に留まらず、今すぐ学習者が日本語を使ってやり取りをする空間となっています。実際のコミュニケーションを日本語で極力行い、そこから学びが生まれるというところにこのクラスの実践意義があるといえます。

ところが、初級の活動型クラスにも難点があります。学習者には事前に蓄えられた日本語の知識がそれほどないため、いいたいことを日本語にするための言語的情報を収集しながら、同時に相手に発信する段階を踏みます。そのた

め、学習者が活動型クラスのみで日本語を学ぶ場合、いわゆる文法や語彙・表現など、通常、教科書クラスで学ぶべきものを自分一人で獲得しなければなりません。以前、教科書クラスのみで勉強した私が生きた話す感覚の欠如で悩んだように、活動型クラスを先に始めた学習者は日本語の構造の理解や言語的知識の欠如で戸惑いを見せることもしばしばあります。私は活動型クラスを主に担当する講師であるため、ここでは活動型クラスの実践意義を中心に述べましたが、実は初級の日本語学習者にとっては教科書クラスと活動型クラスはどちらも有効であろうと思っています。教科書クラスで日本語の構造や語彙・表現などの知識を学び、活動型クラスでそれを用いて、相手に伝える力と相手の話を聞き取る力を身につけることで、学習者の実際に使える日本語の力は補強され、ますます伸びていくと思っているからです。

金龍男（キム ヨンナム）

目次

はじめに 学習者として教師として——日本語学習のライフストーリーから iii

第1章

「教科書クラス」「活動型クラス」、二つの活動……………1

1. それぞれの目的の異なり 1
2. それぞれの学習方法と成果の異なり 2
3. 二つのクラスの異なりから見える新たな可能性へ向けて 3

第2章

学習者がつなぐ「教科書・活動型コース」のコースデザイン……………5

1. 教科書・活動型コースの概要 6
2. 活動型クラスの授業デザイン 7
3. 15週（90分×3コマ/週）の授業案と授業の具体例 13
 - (1) 第1・2週 自己紹介活動 15
 - (2) 第3～5週 トピック1を決める・発表する 20
 - (3) 第6～9週 トピック2を決める・発表する 28
 - (4) 第10週 トピック3を決める・発表する 40
 - (5) 第11～14週 作文を書く・読み合う・書き直す 44
 - (6) 第11～15週 まとめの活動（例：文集作成） 49

第3章

学習者の声——二つのクラスから……………55

1. 活動型クラスを受講後、教科書クラスを受講した学習者の声 55
2. 教科書クラスと活動型クラスを同時期に受講した学習者の声 58